

日本海磯根対策試験（藻場造成） （要 約）

山内 弘子

目 的

深浦町北金ヶ沢地先には、離岸堤が設置されその陸側が静穏域として活用されている。静穏域にはアワビ放流用の投石漁場があるが、そこには浮泥が認められた。そこで、投石漁場に餌料藻場を造成することを目的に、浮泥域におけるホンダワラ類藻場の造成適種を検討した。

方 法

試験場所は、深浦町北金ヶ沢地先の離岸堤の陸側にある、水深7m前後の投石漁場とした。浮泥域におけるホンダワラ類幼胚の発生状況を種毎に比較するため、平成12年5月10日、幼胚着生基質として30cm×60cmのコンクリートブロックを3枚、50cmの間隔で試験場所の海底に設置した後、フシスジモク、アカモク、ヤツマタモク、マメタワラ、ヨレモクの5種の成熟した主枝各々約500gを、大きさ50cm×80cm、目合い5.5mmの網袋に入れ、各基質の高さ30cmの海中に浮くように結着した。同年8月11日、11月17日各々に生育する幼胚を計数するとともに体長を測定した。

平成13年5月28日には、深浦町田野沢地先でモヅク漁に伴って漁獲された生殖器床を形成するヤツマタモクの主枝100kgを入手し、同じ目合いの網袋8組に等量に分けたものを用意し、各々土俵1俵に結着した後、試験場所中央に約5m間隔で投入し、平成14年1月19日には、50cm四方の枠を用いて土俵周辺5か所に生育するヤツマタモクを計数するとともに体長を測定した。

結 果

各基質に着生したホンダワラ類の幼胚数は、8月には8～22個体、平均14個体あって、種を同定できなかったが、11月には20～26個体、平均22.7個体と増加し、全体の60～82%に相当する12～18個体がヤツマタモクと判別できた。幼胚の体長は8月には2mm程度であったが、11月には平均1.5cmに生長した。したがって、ヤツマタモクは浮泥が認められる投石漁場においても幼胚を供給すれば生育できると考えられた。

モヅク漁の操業によって採取されたヤツマタモクを母藻として、幼胚供給による藻場造成を検討した結果、母藻投入から8か月後の平成14年1月には、土俵周辺には平均体長5.4cmのヤツマタモクが12個体/m²観察された。

イシモヅクは、ヤツマタモクに着生したものがハナモヅクと呼ばれ、他のホンダワラ類に着生したものや、岩盤に生育し岩モヅクとされるものより品質が良く、価格が高い。ヤツマタモクは、田野沢ではモヅク漁の操業に伴って漁獲され、モヅク採取後に捨てられているため、生殖器床が形成された母藻を容易に入手できる。本結果によってそのようなヤツマタモクを母藻として藻場造成できると考えられた。

ヤツマタモクはアワビに対するアラメ当量が0.95と比較的高いことが報告されており¹⁾、その藻場造成によってアワビ放流漁場の餌料環境の向上が期待できる。今後、発生、生長したヤツマタモクの生長や成熟状況を調査するとともに、それへのハナモヅクの着生状況からモヅク漁場の形成についても検討する予

定である。

引 用 文 献

- 1) 増殖場造成指針作成委員会（1982）：増殖場作成指針。全国沿岸漁業振興開発協会，99.